

第IV部門 港・神戸の景観分析

大阪工業大学工学部 学生員 ○竹内 陽  
 大阪工業大学工学部 吉田秀章  
 大阪工業大学工学部 池内直之  
 大阪工業大学工学部 正会員 吉川 眞  
 大阪工業大学工学部 正会員 田中一成

1. はじめに

日本の都市は戦後の高度経済成長期を経て、多くの高層ビルや高速道路などが建設された。個々の都市が持つ街の個性を考えない画一的な街並みが構成され、歴史的建造物は陰に埋もれてしまう状況となった。しかし高度経済成長期が終局を迎え、人々の意識にも変化が起こり、個性ある景観を創造する取り組みが各地で行われ始めた。神戸でも「美しい港、緑豊かな六甲山という恵まれた自然を背景に、海、坂、山の変化が富んだ、明るく開放的で、異国情緒豊かな神戸らしさ」を図るため 1978 年に神戸景観条例が制定されている。このように都市が持つ個性によりさまざまな景観が存在しており、一様であるとは限らない。本研究では対象地を神戸とし、神戸が持つ個性ある景観の創出をめざして、歴史と夜景という観点から景観分析を行うことにした。

2. 研究の目的と方法

個々の街の個性を活かした景観の創造には、その街の地理や歴史など、さまざまな特性を理解することが必要である。また、個性ある景観は、市民の生活によって創造されるものである。そこで本研究では、市民の考える都市景観に着目し、景観分析を行うことを目的としている。

研究方法は、神戸の歴史的建造物や景観形成地域の特徴など、現状を把握していく。また、神戸の代表的な景観として、市民により選定された「神戸夜景百選」を用いて分析・把握する。これは神戸をイメージする景観を全国からの公募 1550 件から 100 件に凝縮したものであり、さまざまな景観が選定されている。これを景観分類することでどのようなタイプの見方がされているのかを把握する。また、神戸市民が神戸らしい景観として公募している「景観ポイント賞」も分析対象としている。この賞は昭和 61 年から実施されており、建築物や工作物を市民により毎年数点選定しているものである。これらの選定数を市内の区別に見ると両者共に中央区が半数を占めている。したがって、より詳細な視覚的分析は、中央区を含めて、灘区、東灘区の範囲で行い、特性を見つけることとした。

3. 景観分類

神戸夜景百選にはさまざまなタイプの夜景があり、タイプ別に景観分類を行ったのが図-1 である。まず夜景のテーマに基づき、視点位置が決定されているものを、「視点依存型」としている。またそのうち集積型とは、主対象が非限定であるものである。例えば山の展望台からの眺めなどは、この分類に相当する。また集約型とは、主対象が決められているものである。つまり眺めの中心に限定された対象が存在するものである。

一方、集合型とは、限定された視点は存在せず、対象(群)のみが決定されているものである。そのうち点型は建築物など単体のものであり、面型は公園や地域など対象が面として広がっているものである。

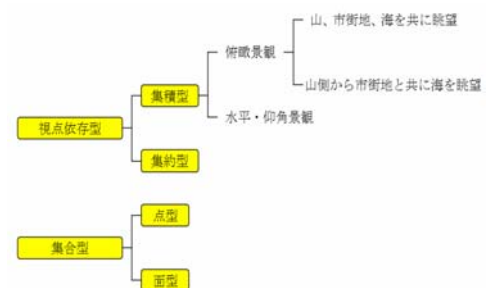


図-1 景観分類図

#### 4. 景観形成地域と歴史的建造物

神戸市では景観形成地域を7つ設けており、景観の向上を図っている。また歴史的建造物が93件登録・指定されている。中でも北野・山本通地区は、歴史的建造物が41件保存されている地区であり、重要建造物群保存地区にも指定されている。これは建造物を点で保存するのではなく、地区全体を面として保存していくことを目的としている。図-2は歴史的建造物の密度分布であり北野・山本通地区に密集していることがわかる。北野・山本通地区は開港当時、海が良く見える丘を好んで外国人が作った地区であるが、現在では近代化に伴い必ずしも良く見えるとはいえない状況となっている。近年ではドラマの舞台になったことを機に観光地として有名となり神戸夜景百選にも選定がなされている。

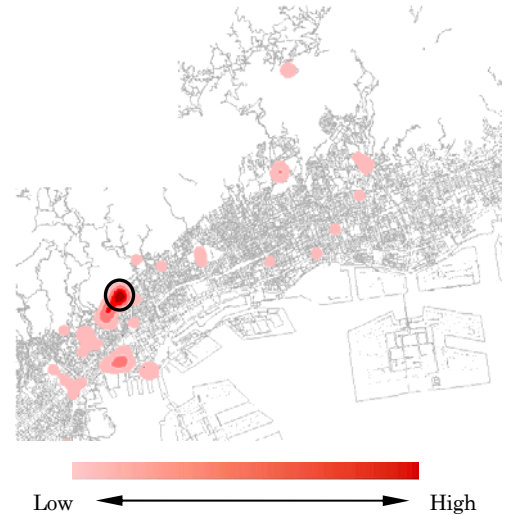


図-2 歴史的建造物の密度分布

#### 5. 可視・不可視分析

可視・不可視分析を行うため都市の三次元モデル化を行っている。構築範囲は神戸の景観を代表する要素が多いと考える中央区、灘区、東灘区である。対象地域の地形モデルには数値地図50mメッシュ(標高)を用い、DMデータにより簡易な建物モデルを構築している。これらの地形モデルと建物モデルを合わせてグリッドサイズ4.0mでラスターライズし、DSM(Digital Surface Model)を作成している。

可視・不可視分析には視点依存型の視点位置を観測点として行っている。山側からの眺めは、展望台や公園、ホテルなど14点選定されており、中には大阪湾まで見えるものもある。この14点の各視点から可視・不可視分析を行った。さらに各視点からの可視領域をラスター演算することで可視頻度の高いエリアの抽出を行ったのが図-3である。可視頻度が高いほど色が濃くなる表現をしており、ここでは六甲アイランドが高いことがわかる。また市街地内から眺望する夜景の可視頻度が図-4である。市街地内の高層ビルからの眺めであるため山の可視頻度が高く、山側視点による結果と同じく六甲アイランドに可視頻度値が高いことがわかる。

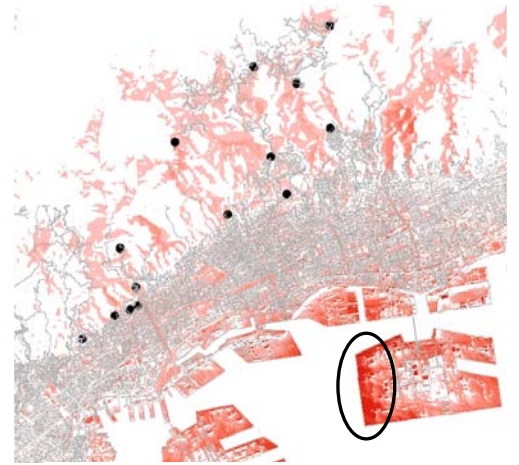


図-3 山側からの可視頻度マップ



図-4 市街地内の可視頻度マップ

#### 6. おわりに

今回、神戸という都市を対象に景観構造の把握を行ったが、可視・不可視分析のみにとどまっている。その結果から可視頻度値の高いエリアを抽出できたが、可視とはただ見えているだけで、人々が意識して見ているものとは限らない。今後は、より景観タイプに合った分析方法の構築に取り組んでいきたいと考えている。

〔参考文献〕神戸の地理 神戸新聞出版センター